

青森県内における柔道クラブチームの現状調査から見える

課題とその考察

佐々木 そら（弘前大学）

1. 目的

本研究では、全日本柔道少年団青森県連合団加盟団体全31チームに対してアンケート調査の協力を依頼し、回答のあった17チームの代表指導者を対象にそのチームごとの実態や指導の状況を知ることから、課題を見つけ、さらによりよい小学生における柔道競技（の指導）のあり方について検討しようとしたものである。

2. 研究方法

調査は大きく、「①チームの概要について、②普段の主な練習内容について、③指導者自身についてと指導体制について、④指導方針について、⑤保護者との関係について」の5つの項目に分け、それぞれに細かい質問項目を設定した。

- 1) 対象者 全日本柔道少年団青森県連合団加盟団体17チームの代表指導者（各1名）
- 2) 調査方法 Google フォームアンケート

3. 結果と考察

1) チームの概要について

今回の調査では年10試合以上に出場しているチームが全体の60%あるという結果となった。平均は9.8試合±2.84という結果となった。ここから上位大会に行くと年間を通して満遍なく試合が行われることとなり、稽古主体ではなく、試合のための練習という状況に陥り、勝利至上主義的な考えに偏ってしまう。しかし少なすぎるのも選手の目標設定がしづらくなってしまふことが懸念される。

2) 普段の練習内容について

練習内容の比率平均を出したところ、立ち技が約4割を占めていて偏りがみられ、試合のための練習になってしまっている可能性がうかがえた。様々な運動能力を高めたり、純粋に柔道を楽しんだりするという視点から見るとトレーニング等ほかの割合を

増やしても良いのかも知れない。

3) 指導者自身についてと指導体制について

指導者の数は平均すると1チーム当たり4.29人±1.85となった。指導者一人当たりが負担する児童数は、平均すると5.8人±5.56となった。どちらも差が激しく、一人でチームを見ているというチームも4チームあることから今後指導を続けていくことや、負担が大きいのではないかという懸念が残る結果となった。指導者の年齢の全体平均は42.02歳±11.51となった。平均年齢以上の指導者は全体の約6割とかなり多く指導者全体の高齢化がみられる結果となった。

4) 保護者との関係について

勝利を望まれていると感じるかの項目において4・5と回答した指導者は約6割いた。また、トラブルがあったと回答した指導者に内容を聞いたところ、子どもが勝てないことが理由でのトラブルがあったことが分かり、保護者からのプレッシャーというものも勝利至上主義に拍車を掛ける大きな要因なのではないだろうか。

4. 結論

1) 年間に出場する試合数が多いところ、少ないところがあった。どちらにもデメリットはあり、優劣をつけるのは難しいが、今後子どもたちに対しても調査などを行うことでみえてくるものがあるのではないだろうか。

2) 指導者の負担が大きいこと、また保護者からのプレッシャーも大きいことがわかった。今後指導者というものへの携わり方への工夫が必要になってくるのではないだろうか。

【引用・参考文献】

・[小学生学年別大会廃止について \(20220314\) .pdf](https://www.judo.or.jp/judo/20220314/)